

2018年度  
海外研修・研究等 助成事業 研修報告

## 海外高校との持続的な 連携事業の構築

～相補的な国際交流に向けて～

静岡県立三島北高等学校 教諭 中島 由美

### 研究の目的

本校は平成26年度に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、海外研修を積極的に行ってきた。特に毎年8月に実施しているベトナムのハノイでの研修に参加した生徒にとって、現地高校でのプレゼン発表や交流の機会は、学びに対する姿勢や視野を広げるまたとない機会となってきた。しかしSGHの指定が今年度で終了することから、来年度以降は同じような規模での海外研修の実施は難しい。これまでの交流の実績を活かしつつ、研修に参加する一部の生徒だけでなく、学校全体としてグローバル人材の育成を継続していくことが求められる。そこで、相手校と直接意見交換をすることにより、対等のパートナーシップ、すなわち相補的な交流の在り方を探ることが本研究の目的である。

### 学校訪問の考察

ハノイ市内の異なる特徴を持つ3校を訪問し、相手校の担当者と直接話をする事ができた。

#### ●交流の対象の可能性となる学校が希望する交流内容

私立学校であるVin高校の校長先生からは、双方の学校が相手校に対して問題解決のタスクを与え、その研究成果を審査しようという交流の提案があった。教員が交流に求めたいとするレベルはアカデミックな点で非常に共感できる。しかし、実際にベトナムの生徒や本校の生徒の交流の様子を観察すると、「楽しく」「興味を持続して」行える交流内容は、お互いの身近な学校生活における小さなことであるようだ。教員や学校側の「教育的なもくろみ」と、交流の主体である生徒自身の満足度のバランスを考えた場合、お互いの生活の紹介を中心としたやり取りからのスタートが妥当であると考えられる。

#### ●より経済的な交流を実現するためのICT環境の実態

ベトナムの一般社会のネット環境は、飛躍的に拡大されつつある。社会主義ながら強力な統制はなく、SNS好きという国民性もある。一方で国立（公立）学校は、教育現場のハード面でICT環境自体が今後さらに整ったとしても、ソフト面で詳細な実施計画の提出が求められ、学校及び教育省からの許可が必要となることもわかった。その点、Vin高校は私立であるため、学校長の判断のみで、柔軟な対応が可能とのことであった。現実的には、まずVin高校とオンライン交流活動を行い、その結果を踏まえ、今後現地の他校も含めた本格的なオンライン交流の実施に向け、準備を進めていくことが妥当と思われる。

### まとめ

街も人もエネルギー溢れるベトナムは、日本にとって戦略的ビジネスパートナーとしての存在感を増している。今回の研修では、「先進国」対「発展途上国」としての固定した関係を飛び越える、生徒同士の交流の様子を目の当たりにした。グローバルな課題にしなやかに取り組む若い世代を共に育てる可能性を具現化する方策を、今後の教育活動の中でもさらに探っていきたい。



現地高校生に向けて研究成果を発表する本校生徒



現地高校生との交流